

大辻 都

2010年1月12日、カリブ海の独立国ハイチの首都ポール＝オ＝プランス近郊においてマグニチュード7の大地震が発生し、30万人以上の死者、数百万人の被災者を出した。同時に大統領府が崩壊するなど首都機能は壊滅し、その後半年以上迷走をつづけた大統領選挙の結果、2011年4月に人気歌手ミシェル・マルテリーが当選したが、もとより経済的には長らく破綻寸前の状態にあったハイチは、震災発生後二年近くが過ぎても、国家として混乱をきわめたままである。

本稿では、経済あるいは行政の観点からみれば機能不全以外の何物でもないこの小国における文学創作の、震災以前、そして震災以後の想像力のあり方と、ハイチという場所との関わりについて考察してみたい。

地震以前

カリブ海イスパニョラ島の西三分の一を占めるハイチは17世紀末から19世紀初めまでの約一世紀、サン＝ドマンゴと呼ばれるフランスの有力な植民地だった。本国の大革命と連動して、大農園の奴隷たち数万人が蜂起し、最終的にはナポレオン軍を退けて、1804年、世界初の「黒人独立国家」ハイチを打ち立てる。

フランスでの公の奴隷解放より半世紀近くも前のことであり、ハイチのこの政治的輝かしさは、有色の知識人にとり長らく賞賛と憧憬の対象となってきた。一方、植民地の損失を名目としたフランスへの賠償金返済やアメリカ合衆国への借金、農業の不振などによる莫大な負債に加え、20世紀半ばのデュバリエ父子による独裁政権、頻繁に襲うハリケーンなどの自然災害と、建国以来、国家としてのハイチ、そしてハイチ人はつねに困難と向き合っている。

ハイチ人作家の多くは、旧宗主国の言語であるフランス語を用いて作品を創り出してきた。農民文学のジャック・ルーマンやマジック・リアリズムの手法を用いたジャン＝ステファン・アレ

クシは、広くフランス語圏で知られている。あるいはジャン・プライス＝マルスの『叔父はかく語りき』のように、ハイチという土地に根づくものを追求し、彼らの日常言語であるハイチ・クレオール語で書く試みもなされている。

経済的には貧窮しながら、文学や美術をはじめとする文化に目を向けてみれば、ハイチは決して貧しい国ではない。アメリカ合衆国による占領とデュバリエ大統領の独裁の端境期である1940年代は、エクトール・イポリットらを中心とするハイチ美術の最盛期であり、アンドレ・マルローをはじめ国外からの高い評価も得た。

一方、独裁政権は多くの国外脱出者を生み、そこには文学者、芸術家も含まれる。最大の受け入れ先であるアメリカ合衆国に渡った移民の中には、エドウィー・ダンティカのように英語による創作をおこなう者もあり、その他の主要な受け入れ国であるフランス、カナダを含め、亡命ハイチ人による文芸・芸術活動も無視できない規模となっている。

地震以後

震災から数カ月を経て、カナダ在住のハイチ人作家ダニー・ラフェリエールは、『私の周りですべては動く』と題された書籍を上梓した。2009年にメジシス賞を受賞したこのフランス語作家は、数日後に開催が予定されていた文学フェスティバルに招かれ、ポール＝オ＝プランスのホテルに滞在していたところ、震災に遭遇する。この催しのため、海外在住作家の何名かがハイチ入りしており、中にはハイチ系カナダ人作家、ジョルジュ・アングラードのように震災で死亡した例もある。

「クロニック」と銘うたれた『私の周りですべては動く』は、ラフェリエールがホテルの食堂で危うく一命をとりとめたその瞬間、そしてそれ以降目にしたもの——町の状況や人々の様子——の断片的な素描と考察の集成である。死者数、先進各国による援助額、平均寿命、識

字率……など、主要メディアが日々伝える情報がさまざまな数字で構成されているのとは対比的に、明日の授業はどうなるのか気にする小学生の言葉、震災翌日も店を広げるマンゴー売りの女性の姿、瓦礫に埋まった子供の声が時間とともにひとりずつ消えゆく光景など、具体的な細部のみが描写され、言葉の断片の集積により地震後のポール＝オ＝プランスの町が浮かび上がってくるのが特徴的だ。「地震はもちこたえるべき硬く、堅固なものを攻撃する。コンクリートは崩壊した。花は生き延びた」¹。くり返される表現により、読者にも風景が共有される。

フランスの文芸誌『セルバン・ア・プリュム』は、上記のラフェリエールやルネ・ドゥペストルら、複数のハイチ人作家の短編作品に絵画作品、写真も加えた特別号を編んだ。本の売り上げは今後のハイチ人作家の出版助成に使われる予定だという。これに近い試みは、英語圏においては、先述のダンティカを編者とし、18人のハイチ人あるいはハイチ系作家の作品を集めた書籍『黒いハイチ』でもおこなわれている。震災前から進んでいた企画だったが、ダンティカの方針で震災後に書かれた短編も数編加えられた。

フランケチエンヌの戯曲『メロヴィヴィ』とスピラリスム

以上は既存メディアの記事とは異質ながら、作家によるジャーナリスティックな仕事の成果といえるが、他所へ移住することなく、混迷をきわめるハイチに留まり続けて独自の創作活動をおこなってきたフランケチエンヌは、地震前も地震後も、その作品の総体がこの国の命運と共振しているという意味で、他に例を見ない重要な作家と位置づけることができるだろう。

フランケチエンヌの活動は、文学創作以外にも美術、演劇など多岐にわたっており、識字率の低い子供たちへの寺子屋的な教育活動を経て、レスリー・マニガ政権時には文化大臣を務めたこともあった。だが中でも注目すべき仕事は、1960年代終わり頃から、ジャン＝クロード・フィニョレらとともにこの作家が推進した「スピラリスム(螺旋主義)運動(mouvement spiraliste)」と呼ばれる文学運動だといえる。ジョイスの実験小説や、同時代にあったヌーヴォー・ロマンからの影響のもとにあるこのスピラリスム運動は、弁証法的な唯物主義を深化させ、永遠の

ものである生の運動を、そのカオス的な構造を通してとらえる試みと理解される。インタビューでのフランケチエンス自身の説明によれば²、スピラルとは、曖昧さ、迷宮、多様性の美的な側面、あるいはアインシュタインの相対性理論をはじめ、科学の分野ではすでに認知されているカオスなるものの美的な側面を指す。また別のインタビューにおいてはこう述べている³。「スピラルというのは自然界の機能の様式の一つであって、素粒子物理、分子生物学、DNAのフィラメントなどに観察されるものである……。結論的に言えば、スピラルはその開かれた構造によって、偶然の概念につながり、今日話題にされることが多いカオス理論につながると思う。私にとって、それは書くという営みを通して人生の本質を見出す一つの試み——幻想かもしれないが——である」。

海外での評価が高まる近年まで、50冊にも達するその著書のほとんどは、作家本人の手作業による自費出版で出されてきたが、その一部は「スピラル」と銘うたれ、戯曲や詩とは別個の一ジャンルとして区分けされている。作家が『マルドロールの歌』との類縁性を主張する『ウルトラヴォカール』(1972年)に始まる「スピラル」作品においては、さまざまな断片で構成された詩とも詩的散文ともつかない、しかし鮮烈な言語表現が繰り広げられる。また多くの「スピラル」作品では、フランス語と彼の日常言語であるハイチ・クレオール語が共存して見られるのが特徴だ。

ジャンルとしての「スピラル」は置くとして、2010年1月の地震直前に書き上げられたフランケチエンスの一作品が「地震を予言していた」と言われている。同年刊行された『メロヴィヴィあるいは罨』で、形式としては8幕の戯曲作品である。「メロヴィヴィ(melovivi)」とは、「罨」を意味するクレオール語だ。地球環境の破壊がもたらす天変地異とそれに打ちひしがれる人間の姿を描いた本作は、戯曲でありながらも、スピラリズムの特徴であるカオス的な側面を十分備えて

いると言っている。以下に『メロヴィヴィ』からいくつかの断片を取り出し、訳出してみたい。

A 驚嘆すべきわれわれの小さな惑星、陸の青、海の青、月の青、苦悩の青、詩人の隠喩的なオレンジと同じくらい青、すばらしいわれわれの小さな惑星が煮えたぎる水と荒々しく残酷な焔の逆巻きのただなかに難破し壊れてゆく。

B 終末の音楽のなかの、大喰らいの割目と断層。

A 磔刑! 磔刑! 八つ裂き、八つ裂き!

B 肉、臓物、切り刻まれた骨。罨の山脈に沿いすべてのランプが消えるとき、都市は、スラム街は、宮殿は、城は瓦解する。

A 耳障りな大殺戮のなかでの、都市の、スラム街の、宮殿の、城の崩壊。

AとB これはオペラのなかの壊疽だ! 鼠たちの死のオペラ⁴! [強調:原著者]

全幕を通し、登場するのは匿名のAとBのみであり、ふたりの対話によって戯曲は進んでゆく。言及されているのは地球の崩壊だが、表れている都市のイメージは、まさに宮殿(大統領府)とスラム街を併せ持つハイチ首都のそれであり、白亜の大統領府が倒壊してゆく地震時の映像と重なってくる。だからといって、何らかの筋が展開されていくわけではない。ただ、振動と、それによってもたらされる転覆、崩落、生命の損壊にまつわる語がたたみかけられるようくり返される。人物の台詞として表されるそれらの語はカオスともとらえられ、ここにもフランケチエンスのスピラリズムを見ることが可能だ。

A 光がない! まったく光がない! 闇のように暗い。放縦な地震の壊れた蝶番を経た

とほうもない闇。われわれに月と太陽と楽園と星を約束した者たち! それどころか奴らは偽りの望みの刺々しさと胆汁の苦さを運んでくれた。光がない! まったく光がない! 明かりの皆無! 明るみのない地平。残っているのは馬鹿馬鹿しい七色のぷかどんと愚かしくも具合よく垂れ下がった縄のいやらしい先端、それぞれの錯乱といっせいの縛り首のあいだにあって、グロテスクで悲劇的に胸糞悪いカーニヴァルのただなかの薄汚く卑怯で不健康な^{メロヴィヴィ}罨みたいな。俺たちは蛙を呑みこんだ。俺たちは鼠と蛭蝨を飲み込んだ。奴らの粘つく嘘とねちっこい約束を鵜呑みにした。月がない。太陽がない。光がない。悪臭のするマルディグラのごてごて飾りをのぞいては。俺たちをとり巻くのは死体と闇だけ。だから光が必要なのだ。

B 俺! 俺は俺と言う! 俺は俺は闇を消し、お前たちに光の房を持ってこよう。俺は救済者だ。すべての危機を解決してやるぞう。

ここで見るような闇のイメージは、全編を通して表れる。「放縦な地震」、また前の引用にある「都市は、スラム街は、宮殿は、城は瓦解する」などの表現から、これを大地震を予言した作品と見る意見が出るのは不思議ではない。だがハイチを闇の世界、「壊疽」に陥った世界と喩えることは地震以前から可能だった。巨大な揺れと転覆は、現実同様作品上も、闇の世界の大団円と見ることができる。言葉によるカオス、うねり、螺旋として持続される作家の創作そのものが、闇からの脱出、光の奪還の試みだといえるかもしれない。

¹ Dany Laferrière, *Tout bouge autour de moi*, Montréal, Mémoire d'encrier, 2010(『ハイチ震災日記 私のまわりのすべてが揺れる』立花英裕訳、藤原書店、2011年)。

² 2007年(日付不明)、ウェブサイト『カライブ・エクスプレス』上のインタビュー。

<http://www.caraiexpress.com/culture/Litterature/article/explication-sur-la-spirale-de-1>(2011年3月12日 検索)

³ 恒川邦夫『フランケチエンス——クレオールの挑戦』現代企画室、1999年、44ページ。

⁴ Frankétienne, *Melovivi ou le piège*, Paris, Riveneuve éditions, 2010, p. 50.

⁵ *Ibid.*, p. 43.